

ように、夫人のためのプログラムを用意しなければならぬであろう。

筆者は、今回のシンポジウムを通して、IAU主催のシンポジウムは準備から開催まで時間がかかりすぎ、研究発展の激しい分野には向かないのではないかということ、総花的で焦点がはっきりしないという感じを持った。時間がかかるというのは、“権威”あるIAUより、IAU主催のシンポジウムとして承認を得るには、少くとも開催の1年前までに、IAU主催の研究集会に関する規則にことまかにかかっている諸条件をみえず準備に時間がかかるからである。今回のシンポジウムは昨年9月に承認をうけたわけであるが、それまでにマースデン組織委員長、古在国内運営委員長、IAU執行委員会書記との間には数10回にもおよぶ、手紙、テレックス、電話によるやりとりがあった。シンポジウムは、IAUの2つ以上の委員会によって提案されなければならない。組織委員会の構成メンバーは提案した委員会の正副委員長がなることが多く、悪い意味での民主的にならざるを得ず、トピックなりテーマが散漫になる。したがって発表論文の取捨選択もどちらかという、どれかのトピックとわずかでも関連があればよいということになり、よけい焦点がぼけざるをえないように感じられた。かといって、

IAUという権威あるところからのお墨付きがなければ、日本国からの補助金をもらうのは非常にむづかしいであろう。

最後に会場でのエピソードをいくつか紹介しよう。奥さんがオーバーヘッドプロジェクターを操作して御主人の発表を助けたり、息子さんが父親の論文を代読し、父親はオーバーヘッドプロジェクターの操作するという光景もあった。昼休みで会場がからっぽになったあと、扉を閉めて会場に入る人がいるので、何かかと思つて中をのぞいてみると、午後には自分の発表があるので、実際にスライドをうつしながら、発表練習をしているのであった。各セッションの議長の署名をもらっている人がいたので、何のために使うのかとたずねてみた。すると、その人は、いろいろの所から旅費の補助を受けていて、その中のひとつが、本人がたしかに会議に出席していたという証明を要求しているの、議長の署名をもらっているとのことであった。

会場の準備・設営に細心の注意を持ってあたられ、また運営の縁の下の力持ちとして御協力いただいた水路部編暦課の方々、陰に陽にお手伝いしていただいた天文台の方々、シンポジウム運営経費の不足解消のため快く募金に応じて頂いた各界の方々には心からの謝意を表する。

シンポジウムに参加して

吉 田 春 夫*

筆者がこのシンポジウムの事を初めて知ったのは古在さんが昨年天文月報に書かれた記事によってであった。見ると「太陽系の力学」とある。学生の身分で、しかも居ながらにして天体力学のシンポジウムに参加できるなどは夢のように思えたものであった。そして期日が近づいてくると遠足を目前にひかえた小学生の心境ながら落ちつきの無い毎日。……しかし「祭り」は終って、今は日一日と不確かになっていく記憶が残るのみである。

成田空港にて (5月22日)

5月20日に開港した成田空港に一番機が到着したのが21日。そして出席者のうちの何人かは22日に成田に着くことになっている。しかし当時は乗客以外の送迎客は空港ターミナルビルに入ることは許可されていなかった。しかるにソ連からの参加者はルーブル(ソ連の通貨)を国外に持ち出せないという事情の為、空港で現金を手渡さなければ身動ききかないことになる。そこで天文教室の堀さんを陣頭に筆者と筆者の友人、その彼女(註:友人の彼女)という奇妙な編成で一路成田へ。誰で

も京成電鉄の成田空港駅までは行けるのだが駅から所要時間5分のターミナルビル行きバスに乗るのが難しい。まずは機動隊のお兄さんに事情を話す。一通り終えると次は私服警官に同じことを話す。次にもう少し偉い人。最後に空港公園の偉い人が出てきて2人なら許可しますと言う。そこで筆者と堀さん、がらがらのバスでターミナルへ。ボディチェックの後到着ロビーに着いたが羽田空港とは違って閑古鳥が鳴き出しそうな気配。我々に対して怪しさを抱いている多くの私服警官が何よりの慰めであった。そこへソ連からのオマロフさん到着。さっそく現金8万円を手渡すと、心配事が一気に解消したと言わんばかりのニコニコ顔。お土産にガザフ産のプレスレットを奥さんに、と言って頂いたがよくよく考えてみるとその資格のない筆者は今なお処置に悩んでいる。

シンポジウム会場にて (水路部, 23~26日)

初日、開会の辞のあと一般講演に先だつて萩原雄祐先生の特別講演があった。「天体力学の現状」という題のレビューで内容は天体力学の目的、解を得るには必要な数だけの第一積分があればよいがブルンス、ポアンカレによって不存在が証明されたこと、その為に逐次近似によ

* 東大理学部

るしかなく摂動論が各種展開されたこと、そして今世紀最大の数学・力学者が天体力学にいかにか挑戦したかを網羅したものであった。そして最後には問題提起として

「……エノンは数値計算によって周期的とエルゴード的の領域を surface of section 上の島 (islands) と海 (seas) として発見した。この結果は3体問題において古典積分以外には一様積分はないというポアンカレの定理に対して、一様でない積分が存在することを示している。そこで問題はこれらの領域の境界に対するあらわな表現を与えることである。……」

筆者かねてから萩原先生の話を知りたいという願望があったが、こんな形で突然にかなえられてしまった。

最も精力的だった人のひとりにアイルランドのキャンさん (Kiang) がいる。彼は自分の講演時間以外に議論の為特別に時間を設けてもらい西独のシェーバートさん、ショルさんにかみつく。彼の理論によると木星の2:1, 3:2の共振関係にある小惑星の軌道がそれぞれ不安定、安定になることが付随するヒルの方程式から言える、と言うのだがそんなことは無い、とショルさん反撃を加える。東京天文台の青木さんに言わせるとキャンの話は根も葉も無いということだが。

講演者中唯一の女性はフランスのボルデリーさん。内容は火星の自転の話である。ぼんやり聞くとフランス語かな、と思う。しかし耳をすませば but や of が確かに入っている。フレンチイングリッシュの初めての体験であった。element はエレモン、Hamiltonian はアミルトニアンのみである。フロシュレさんも似たようなものであった。フランス人の英語がこうも解りにくいとは実は意外。同じくフランスのブレタニオンさんは講演後の議論にオーストリアのドボラクさんを通訳に使う。英国のメセージさんと初めは通訳つきでやったが、面倒になったのか両人フランス語でやり出すという一幕があった。日本人の英語の例としては緯度観測所の谷川さん。全講演中最後の数学的な話で聴者を煙にまいていたが1ヶ所、3.0を“three point zero”と読むべき所を“さんてんぜろ”と言いあわてて訂正。場内どっと笑いが起ったが、もちろん日本人のあいだだけである。

代読という形式も筆者にはなじみが無かった。日本には来ずに論文だけを提出すると、それを代わりの誰かが読むのである。代読最多記録者は堀さんとフランスのマーシャルさんの2回である。堀さん、3回めはご自身の月運動論に関する論文であったが、講演の最初に曰く、「皆さん、このシンポジウムにおいて3度目の論文を紹介することを嬉しく思います。ただ特に嬉しく思うのは今回が私自身の論文だということです。」

新宿住友ビル 52 階宴会場にて

一通りアルコールの入った所でマースデンさん (米)、

ガールフィンケルさん (米)、ジェフリースさん (米)、古在さんの順でスピーチがあった。マースデンさん、まじめな話をしている時以外はいつも人を笑わせる。シンポジウムのいきさつを述べ、萩原先生が当会場に出席できなかったことを残念がると思いきや「コックドール」という店の名前にかこつけて「チキン、チキン」とかん高い声を張り上げる。ガールフィンケルさん、萩原先生の著作“Celestial Mechanics”の完結を祝うとともに書中にある超楕円関数の理論を彼のトロヤ群小惑星の運動理論で応用中であるとのこと。ジェフリースさん、会の運営にあたった人の名を1人1人挙げ感謝を表すると今度は古在さんがそれにニコニコ顔で応えた。

筆者、カセットテレコを肩にさげ、食うものを食わずインタビューに専念した。日本に地下鉄があって驚いたというフランスのマドモアゼル。今日でも日本人は皆、キモノを着ていると信じていたマースデンさん。テキサスと違って日本には緑と水があって羨ましいというナゴジーさん。日本に着いて最初に口にしたのはサントリーオールドで、よく思い出してみるとそれをすすめたのは筆者自身であった、というジェフリースさん。五反田のホテルから東銀座の会場まで毎日歩いていたというのはエバーハートさん。ずいぶん若いのに自分にはシャンなセクレタリーがいるとは西独のショルさんである。

住友ビルを囲む街の灯は複雑な微細構造をもつ銀河円盤の中の星であった。歓談の中に時間を忘れ、ふと気がついてみると閉会の時間は迫っていた。そして出席者は再び自らの星へと散り始めていた。

そし て

すべてが終わって日常生活に復帰するのに多少日数を要したのは筆者だけであろうか。若干の収穫を挙げるとまず語学面。ヒアリングは何よりも大切だということ。度胸さえあれば何を話しても英語国民には通ずるとのこと。しかし英語国民以外の人に対してはある程度文法にかなった英語が必要なこと、などである。また天文に関係する事としては、論文の著者といえども研究の方向性、結果の有用性などについて絶大な自信を持っているわけではなく内心不安を抱えている、ということも盗みとることができたことである。何はともあれ居ながらにして貴重な体験をたくさんさせて頂いた。これもシンポジウムの最高責任者であり経費の工面でずいぶん以前から方々を駆けずりまわっておられた古在さん、水路部の会場を使うにあたり、連日細心の心配りをされていた進士さん、セクレタリーとして会期前後を通じての膨大な事務をいとも簡単そうにやっつけてくれた木下さん、を始めとして水路部、東京天文台の多くの方々の献身的な尽力のお陰であります。ここに改めて深く感謝の意を表します。